

# 念仏の「始終両益」について

佐藤健

はじめに

念仏の利益を始・終という二つの観点から捉えることは道綽（五六二〜六四五）の『安樂集』に見られるものである。それ以後、日本の法然によつて採用されるまで注目された形跡をみない。ここでは『安樂集』における「終始両益」の発想の起因、背景などを検討すると共に、法然における受容の態度をも考えてみたい。また、この「始終両益」と「現当三益」との関連についても明らかにしたい。

## 一、始終両益の根拠

道綽は『安樂集』第四大門において『観経』及び他の大乘經典の多くが念仏三昧をもつて宗要とすることを明かしている。その第四に

依観経及余諸部。所修万行能廻願。莫不皆生。然念仏一行將為要路。何者。審量聖教。有始終両益。若欲生善起行。則普該諸度。若

印度學佛教學研究第四十八卷第一号 平成十一年十二月

滅惡消災。則總治諸障。故下經云。念仏衆生撰取不捨。壽尽必生。此名始益。言終益者。依観音授記經云。阿弥陀仏住世長久。兆載永劫亦有滅度。般涅槃時。唯有観音勢至。住持安樂接引十方。其仏滅度亦与住世時節等同。然彼国衆生一切無有観見仏者。唯有一向專念阿弥陀仏往生者。常見弥陀現在不滅。此即是其終時益也。所修余行迴向皆生。世尊滅度有観不観。勸後代審量使沾遠益也。〔大正〕四七、一五、上）とある。

「念仏一行」には他の行にない始益・終益という二つの利益があるので多くの經典が念仏三昧をもつて往生の要行とするという。

始益は阿弥陀仏の光明が念仏一行の衆生をのみ撰取して捨離せず、命終にはかならず往生するという利益である。また終益は往生した衆生において、念仏一行の衆生のみたとえ阿弥陀仏に入涅槃があり、他の衆生が阿弥陀仏を見ることができなくても、特別に阿弥陀仏を見ることができるとする利益

である。この始益としての利益は『観經』の「光明撰取」の利益のことである。

一方、終益というのは『観音授記經』の「得念仏三昧。常見阿弥陀仏」の説示によるものである。しかし、この終益は兆載永劫という限りなき遠い未来に受けるころの利益である。従つて現在往生を求める衆生からすれば来生の最終時の利益とされるのである。この来生の利益からすれば現生の「光明撰取」、「臨終往生」はごく最初の利益ということである。念仏の「現当二益」は往生を第一義とする浄土教においてよく主張されるのに対して、この「始終両益」はあまり用いられない。

問題となる『観音授記經』は劉宋の曇無竭の訳出したもので、すでに「如幻三昧」を体得した観音、勢至の二菩薩が阿弥陀仏の正法滅後に順次如来になることを説くものである。道綽が引くところは

阿弥陀仏当般涅槃。般涅槃後。正法住世等仏寿命。在世滅後。所度衆生悉皆同等。仏涅槃後。或有衆生不見仏者。有諸菩薩。得念仏三昧。常見阿弥陀仏。〔大正〕十二、三五七、上

と説くところである。

經典に「得念仏三昧」とあるのを、道綽が「一向専念阿弥陀仏往生者」としていることに注目される。これは『無量寿經』の三輩段の「一向専念無量寿仏」によるものと考えられ

る。道綽によれば阿弥陀仏の入涅槃時の利益にあずかることができるのは、阿弥陀仏を信じ一向に専ら念仏を修した往生者ということになる。

道綽当時、この『観音授記經』の阿弥陀仏入涅槃の説示は、「無量寿仏」としての阿弥陀仏を信じる浄土教徒にとつては重要な問題であつた。阿弥陀仏の報身説を揺るがしかねないものである。事実、道綽の時代において淨影寺の慧遠はこの經説を根拠に、阿弥陀仏の寿命は長遠ではあるが終尽があるとする。<sup>①</sup>つまり終益の「終」は阿弥陀仏終尽時をいう。<sup>②</sup>

## 二、深厚善根の衆生

道綽はこの『観音授記經』の説示を第一大門の阿弥陀仏の身土を明かすところにも用いている。それは

問曰。如来報身常住。如何観音授記經云。阿弥陀仏入涅槃後。觀世音菩薩次補仏処也。答曰。此是報身。示現隱没相。非滅度也。彼經云。阿弥陀仏入涅槃後。復有深厚善根衆生。還見如故。即其証也。〔大正〕四七、五、下

というものである。

阿弥陀仏の入涅槃は真の入滅ではなく報身としての阿弥陀仏が仮に穩没の相を現したものである。それが証拠に入涅槃の後でも善根が深厚なものは以前と同じように見ることができるといふ。經典に「得念仏三昧」とだけあつたのを、ここ

では「深厚善根の衆生」という内容が付加されていることは、念仏の衆生は善根の厚いことを明かそうとする意図のあつたものといわなければならない。

さきに述べたように道綽においては『観音授記經』の「得念仏三昧者」は、本願の念仏の専修者であり、その念仏者は善根が深厚であるから、阿弥陀仏の終尽時においても阿弥陀仏を見ることができるといふことになる。

念仏の功德のすぐれていることは、第四大門に多くの經典を引用して示している。そのなか念仏三昧とそれ以外の三昧の優劣を論じ、「念仏三昧の優れた相は不可思議である」と述べている。そして『大智度論』により、念仏三昧には貪欲、瞋恚、愚痴といった三毒を除くことができると共に、過去、現在、未來の三世にまたがる一切の罪障をすべて取り除くことができるとする。これは他の三昧にはない念仏三昧の特性である。<sup>(3)</sup> 念仏が未來にまで効力を及ぼす働きをもつところに念仏の終益との関連を見ることができ。この念仏三昧の勝行性こそ余行の往生者には得られない終益の根拠といえる。

道綽が念仏と万行（念仏以外の行）を対比して念仏を善根深厚な行とみたのは、万行を善根薄少とみる姿勢があつたことを示すものといえる。そして念仏が深厚な善根である根拠は阿弥陀仏と直接関係のある本願の念仏であるということに帰結するのである。

念仏の「始終両益」について（佐藤）

### 三、報身としての阿弥陀仏

先に少し触れたが、道綽は『観音授記經』に説く阿弥陀仏の入涅槃は、如來の報身の側面としての休息穩没の相であつて真の入滅ではないとする。それは阿弥陀仏が入滅した後も善根の深厚な衆生（念仏の衆生）は以前と同じように阿弥陀仏を見ることができるとすることによる。

この「休息穩没」という報身のありかたは後魏、勒那摩提の訳出した『究竟一乘宝性論』の受樂仏の五種の神通力の一つである。<sup>(4)</sup> 道綽はこの『宝性論』により「報身有五種相。說法及可見。諸業不休息及休息穩没。示現不実体。」（『大正』四七、六、上）と、法身の五種相を述べている。この「受樂仏」というのは報身仏のことである。

五種の相は

- ① 說法（今、現在說法する）
  - ② 可見（衆生により觀見される相好がある）
  - ③ 諸業不休息（利他のはたらきは休息がない）
  - ④ 休息穩没（善根淺薄な衆生のために穩没を示す）
  - ⑤ 示現不実体（報身よりもたらされる八相示現の応身）
- であり、報身の特相とされる。<sup>(5)</sup>

つまり道綽は阿弥陀仏が報身仏であることを証明するため、『観音授記經』の般涅槃が真の入滅ではなく報身仏が善

根淺薄な衆生を教化する手段として姿を隠す「穩没の相」であつて、むしろこれは阿弥陀仏が報身たる証拠ともなるべきものとする。阿弥陀仏の報身を立証するだけでなく、さらに積極的に念仏の終時における利益として主張したところに「始終両益」の意義がある。

#### 四、法然における受容

この『安樂集』の念仏の「終始両益」の説示は道綽滅後五百数十年を経て、日本の法然において採用されるのである。

法然是『選択集』の第十一章、讚歎念仏篇において、雜善と念仏の功德を對比して念仏が超絶した行であることを明かしている。そして念仏には現当二益のあることを述べ、その後道綽のこの念仏の「始終両益」の説示を引用して

当知念仏有如此等現当二世始終兩益。应当『大正』八三、一四、下と結んでいる。法然是念仏行者が觀音、勢至菩薩によつて常に影護されるのを現益といい、淨土に往生してやがて成仏することを當益とする。そして念仏以外の余行においてはこのような現当二益を得ることができないとする。『選択集』においては『安樂集』の「始終両益」の説示を引くだけであるが、『西方指南抄』卷上本所収の「法然聖人御說法事」には

マタ涅槃穩没ノ期マシマス。コレニツイテ。アワレナルコトコソ

候へ

と、釈尊の入滅時における羅漢、大士の悲嘆に推しあてて、この阿弥陀仏の入涅槃における離別を悲しむべき哀れなることとしてゐる。永劫にわたり仏の慈愛のもとに過してきたものが、突如仏の入滅による離別を体験することは実に悲嘆の極まりといわなければならない。想像するだけでもそれら恐ろしいことである。しかし念仏一行に励む衆生は以前と変わらず仏を見ることができるのである。入滅の悲哀が強ければ強いほどその喜びは大きいといえる。法然是釈尊の入滅時における弟子の悲嘆（此土・過去）と阿弥陀仏の入涅槃（未來・彼土）という異なりはあつても離別の悲哀という人情の機微に訴えてこの「始終両益」を受け取るうとするのである。

以上、この念仏の「始終両益」は、『觀音授記經』の阿弥陀仏の入涅槃の説示に起因し、阿弥陀仏の報身であることを証明する過程において派生した念仏利益説であるといえる。道綽が阿弥陀仏の入涅槃の時でも一向專修の念仏者のみは以前と同様に阿弥陀仏を見ることができるとするのは、その念仏が本願の念仏であるという念仏の真实性に対する確信があつたからである。「始終両益」は「現当二益」をその内容に包含するものではあるが発想の根拠を異にするものといえる。

1 慧遠の『觀無量壽經義疏』本に「今此所論是応非真。故彼觀

音授記經云。無量寿仏命雖長久亦有終尽」(『大正』三七、一七三、下)とあり、また『無量寿経義疏』上巻には「云何得知応非真。如觀世音及大勢至授記經說。無量寿仏命雖長遠。亦有終尽。彼仏滅後。觀音大勢至次第作仏」(『大正』三七、九二、上)とある。

2 『安樂集』には「始と終」という観点で論じられる箇所が二つある。一つは第二大門に穢土の仮名人と淨土の仮名人を横に言えば迷悟の別があるが、豎に因果をいえば始終同一の行者である(『大正』四七、一二、上)。もう一つは、同じく第二大門に娑婆は穢土の終處、安樂世界は淨土の初門(始處)(『大正』四七、一〇、上)という。

3 道綽が「始終兩益」を明かすにあたり「若欲生善起行。則普該諸度。若滅惡消災。則綏治諸障」とあるのは、この念仏三昧の超絶した功德のことであると考えられる。

4 この五種神力は卷四の「身軀清淨成菩提品第八」にある仏身を讚歎する二十五偈のなかの十一偈と十二偈に説かれる。(『大正』三一、八四三、上)

5 山本仏骨著『道綽教學の研究』三四二頁。

6 法然の著作、法語において「始終兩益」を引用するのは『選択集』の他に『黒谷上人語灯録』卷第二所収の『觀経釈』と、同じく卷第七所収の『逆修説法』と『西方指南抄』所収の「法然聖人御説法事」の三書ある。この中『觀経釈』は『選択集』とほぼ内容が同じである。異なるのは現当二益の説示がないのと、念仏行者は阿弥陀仏、觀音、勢至等に守護されると、二尊が三尊になっている。(『大正』八三、一二五、上)。

7 この涅槃穩没相を「哀れなごと」と受け取るのは、この『西方指南抄』と『逆修説法』(『大正』八三、一四六、中)である。

念仏の「始終兩益」について(佐藤)

ただ『逆修説法』は、内容を要約している。したがって「始終兩益」に関する説示は法然の著作において大きく二系統があることになる。

(キーワード) 『安樂集』、『選択集』、道綽、法然、念仏の利益

(佛教大学講師)

## 新刊紹介

庵谷行亨著

### 日蓮上人の觀心論

A5判・三六二頁・定価二二、〇〇〇円  
山喜房佛書林・平成十一年二月一六日